

## ネパール農業における総合生産性が食料消費水準に及ぼす影響

共生基盤学専攻 共生農業資源経済学講座 開発経済学 森岡 昌子

### 1. はじめに

ネパールは後発開発途上国に属し、その貧困率は、1995年から2003年にかけて約26%減少したが、それは都市部を中心とした貧困削減であり、農村部には依然として一日に必要な食料を手に入れることができない人々がいる。ネパール全体の人口のうち、8割は農村部に住み、7割は農業に従事して、自給的な農業を営んでいる。つまり農業生産は農村部において重要な食料供給経路であり、食料安全保障において重要な役割を担っている。そこで本論文では、ネパール統計局によるNepal Living Standard Surveyを用いて、1995年から2003年にかけてのネパール農業の総合生産性(Total Factor Productivity, TFP)の変化を計測する。そして総合生産性の変化と一人あたり食料消費水準の関係を明らかにし、食料消費水準に及ぼす影響について分析する。

### 2. 方法

生産性という場合、労働者一人あたりの生産性という意味で、労働生産性を用いられる場合が多い。しかしながら、農業では、労働力のみならず、土地、肥料、殺虫剤などの生産要素が有機的に組み合わせることで農産物を生産している。生産性について議論する場合、労働力以外の生産要素を無視すると、誤った結論を導く恐れがある。そこで本論文では、ネパール農業の生産性を、すべての生産要素を考慮するTFPで計測する。またパネルデータを用いて、同一家計における生産性の変化について分析するため、農地条件、気候、コストなどのコントロールが困難な異質性を取り除くことができる。

一人あたり消費水準の変化と、各農家家計で計測されたTFP、各世帯の特徴の関係を推定する。また、全体を農業生産にそれぞれ特徴があるMountain, Hill, Teraiの3地域に分け、地域別の影響の大きさについても分析する。

### 3. 結果と考察

分析の結果、1995年から2003年にかけてネパール農業の総合生産性は約1.98上昇していることが確認された。また、ネパール農業の生産性の向上が、一人あたり食料消費水準に正の影響を与えることが明らかとなった。しかし、地域別に分析すると、農業生産が最も盛んなTerai地域において、有意な関係が見られないという結果になった。この要因の一つとして、Terai地域は他地域よりも小作地が多いことが挙げられる。つまり、農業生産性が上昇しても、小作料として地主に農産物を納めてしまうため、農家の手元に残る農産物に影響を与えないということが考えられる。

### 4. おわりに

本論文では1995年から2003年のネパール農業の生産性の変化を、TFPを用いて計測し、8年間で農業生産性が向上していることを確認した。またその農業生産性の向上が、家計レベルで一人あたり食料消費水準に貢献していることを明らかにした。しかしその影響の大きさは地域ごとに異なるため、今後の課題として、地域別にTFPを上昇させた要因を分析する必要がある。また、今回の分析対象には、ネパールの最貧困層とされる土地なし農業労働者が含まれていないため、同様に今後の課題としたい。